

バドミントン観戦における観戦者特性と観戦動機に関する研究

Motives and characteristics of badminton spectators

1K10C094 大藪 俊祐

主査 松岡宏高 先生

副査 関一誠 先生

【目的】

バドミントンに対する世間の関心が近年の国際大会における好成績や、競技人口の増加によって高まっていく中、バドミントン観戦者の観客動員数は減少傾向にある。さらに一部の人気選手の大会出場によって観戦者数が大きく変動しているというのが課題としてあげられる。そのため、観戦者数減少を食い止め、安定した顧客を獲得することが求められている。

その一方で、バドミントンに関する研究には、技術や戦術に関する研究が多数を占め、観戦者を対象にした研究がほとんど存在せず、バドミントン観戦者についての知見の蓄積はなされていないのが現状である。

そこで本研究では、バドミントン観戦者数の増加と、安定した顧客の確保の戦略検討に必要な基礎資料を得るために、バドミントン観戦者における観戦者特性と観戦動機を明らかにすることを目的とする。

【方法】

2013 年 9 月 21 日(土)に、東京体育館にて開催された YONEX OPEN JAPAN 2013 における中学生以上の日本人観戦者を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は試合開始前の観戦者に配布してその場で書いてもらい、回答後すぐに調査員が回収した。348 部回収し、有効回答は 332 部であった。

質問項目には、基本属性として「性別」「年齢」「バドミントンプレイ経験」の 3 項目、観戦者特性として「会場までの所要時間」「観戦人数」「同伴者」「情報入手手段」「情報入手時期」「入場料に対する意識」「応援選手の有無」「観戦動機」の 8 項目を設定した。観戦動機は、16 項目の質問を「鑑賞」「ドラマ」「逃避」「交流」「知識」「選手応援」「チーム応援」「イベント」の 8 要因に分類し、その平均値を算出して測定した。基本属性と観戦者特性をクロス集計、t 検定、一元配置分散分析によって比較し、統計的有意差をカイ 2 乗検定によって確認した。

【結果】

観戦者の基本属性を見ると、男性が 55.7%(n=185)、女性が 44.3%(n=147)であり、平均年齢は 34.3 歳、バドミントンプレイ経験は未経験者が 8.7%(n=29)、経験者が 91.3%(n=303)となり、バドミントン経験者が圧倒的に多いという結果になった。

観戦者特性を見ると、2 人から 4 人の少人数グル

ープで、友人や知人、家族と観戦に来る者が多かった。所要時間は 30 分から 1 時間が 40.1%(n=131)と最も高かったが、2 時間以上かけて来場する者が 23.2%(n=76)と、こちらも高い割合を示した。情報入手時期は 1 年以上前から知っている者が多く、手段は主に大会 HP が利用されていた。特定の応援選手がいる観戦者が多く、全体の 72.6%(n=236)の割合を占めるということがわかった。観戦動機については、「鑑賞(M=6.47)」および「ドラマ(M=5.83)」が高い値を出した。

性別による観戦者特性では、女性は男性よりも多人数で観戦に訪れ、観戦者同士の交流を重視するという特徴がみられた。年齢と観戦者特性では、10 代と 60 代が観戦に対して積極的であるという特徴がみられた。また、10 代、と 60 代は多人数で観戦に来ているのに対し、30 代と 50 代はひとりで観戦に来ている者の割合が高かった。バドミントンプレイ経験と観戦者特性では、バドミントン未経験者は、経験者と比較して、観戦に対して消極的であるという特徴がみられた。

【結論】

本研究の結果、バドミントン観戦者は、ほとんどがバドミントン経験者であり(91.3%)、未経験者は試合観戦に対して重視することが限られるため、観戦に消極的であるということが考えられる。また、観戦者は試合の内容に関心をもつ傾向にあり、岸(2007)が述べた結果を支持するものであった。

観戦者数増加のために、まずは未経験者をどのようにして観戦に導くかを考える必要がある。そこで、情報入手手段として利用率の高かった大会 HP のコンテンツを充実させ、未経験者でもバドミントンに関する知識を得ることができるようにすることが挙げられる。

【今後の研究課題】

本研究によってバドミントン観戦者の基礎的データを得ることはできたが、国際大会の準決勝という極めて特殊な事例となってしまう、測定結果に偏りが出た可能性も考えられる。大会の規模や会場によって回答の傾向は変化していくものであると考えられるため、今後もバドミントン観戦者に対する継続的な調査が求められる。